

平成 22 年 5 月 24 日現在

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2006～2009

課題番号：18520430

研究課題名（和文） 英語能力育成を目指した小・中連携による英語教育実践の縦断的調査
 研究課題名（英文） A longitudinal study of English education through close relation between elementary school and junior high school for the purpose of fostering students' English ability.

研究代表者

白畑 知彦 (SHIRAHATA TOMOHIKO)

静岡大学・教育学部・教授

研究者番号：50206299

研究成果の概要（和文）：

沼津市で実施されている「言語教育特区」における「英語の時間」での英語教育の実施によって、英語能力が伸びるのかどうか調査するのが目的であった。具体的な英語科の時間数は、中学校で、プラス 1 時間され、年間 140 時間（普通は 105 時間）、小学校では 3 年生以上で週 2 時間程度の英語の時間があった。このような状況で、小学校 6 年生の修了時期と中学 3 年生修了時期で英語能力が伸びているかどうか調査した。その結果分かったことは、聴解能力、発話能力、語彙能力は伸びていたが、文法能力は伸びていなかった。この結果はある意味で妥当な結果であったと言えよう。なぜならば、1 時間増加された「英語の時間」は、口頭でのコミュニケーション能力を重視した授業構成になっており、文法能力に重きを置いた活動はしていなかったからである。ともかく、小学校での英語の時間を設けることと、中学校で 1 時間英語の時間が増えることは、生徒の英語能力を伸ばすことが出来ることがわかった。その意味で、言語教育特区の取組は無駄ではなかったと言えるだろう。

研究成果の概要（英文）：

The purpose of this research is to examine whether the students in Numazu City can develop their English abilities after they have experienced special English curriculum called 'English Hours,' which was set up in 'Special District for Language Education.' Pupils at elementary schools and students at junior high school in Numazu have extra English classes. I hypothesized that these extra English hours should contribute to the development of the students' English abilities. The experimental results were that students were able to grow their word knowledge, listening ability and speaking ability, while they remained the same in terms of their grammar knowledge. I think we can predict these results because teachers emphasize oral communication ability in English Hours. Since students developed their English abilities, it can be said that the curriculum of Numazu City was successful.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,100,000	0	1,100,000
2007年度	800,000	240,000	1,040,000
2008年度	800,000	240,000	1,040,000
2009年度	700,000	210,000	910,000
年度			
総計	3,400,000	690,000	4,090,000

研究分野：言語学

科研費の分科・細目：外国語教育・第二言語習得

キーワード：小学校での英語教育、小中連携、沼津市の言語教育特区、言語科

1. 研究開始当初の背景

沼津市は、平成 18 年度から 2 地区(小学校 4 校、中学校 2 校)、合計 6 校で小・中連携の英語教育が開始される。この 6 校を対象に、子ども達の英語能力がどのように伸びていくか調査を開始しようと考えている。特に、小学校での英語活動によってどの程度英語能力が身につくかが調査の中心である。

2. 研究の目的

本研究の目的は、静岡県沼津市で平成 18 年度から実施される小学校・中学校(小・中)連携の下におこなわれる英語教育実践を縦断的に観察し、生徒に身につく英語能力がどの程度のものになるのか調査することである。「連携のとれた小・中一貫教育をおこなえば、中学生の英語能力は現状よりも全体的に向上するはずである」という仮説を立て、その検証をおこなう。

小学校と中学校の連携さえスムーズに行けば、小学生にも英語能力は身につく、さらに、中学 3 年生の卒業時点で、現状の中学 3 年生の英語能力よりも能力が必ず向上するという仮説を立てている。

小学校の英語教育実践を参観して一番感じることは、その連携の悪さである。中学校とまったく連携をしていないで活動をおこなっているため、小学生がせっかく身につけた英語能力は上手に引き継がれない。このため、中学 1 年生から英語を学習し始めた生徒達にじきに追いつかれてしまう。連携がスムーズに行われた際の小学生と中学生の英語能力を測定していきたい。

3. 研究の方法

平成 18 年 4 月より、月に 1、2 度、私の講義のない水曜日に、沼津市の小・中学校を訪れる。観察当初は無理のないように、1 度の沼津行きで 1 校の訪問に限定していきたい。沼津市教育委員会からは平成 17 年度の内から私の学校訪問の承諾を得ている。

1 時間目から授業参観をさせていただき、午前中の 4 コマを観察する。こうすれば、小学校(3 年生～6 年生の 4 学年)も中学校(3 学年)も、1 回の訪問で全学年の授業参観が可能になる。午後は大学に戻り、その日の反省と授業内容をノートに整理する。

要するに初年度の 1 年間を通じておこなう

ことは、授業を定期的にビデオ撮影し、分析していくことである(この授業分析やデータ整理を学部生、大学院生に手伝ってもらう)。特に小学生の場合は、ビデオ撮りが観察の中心になる。

次の作業として、第二言語習得研究の先行研究で使用された実験方法や、私自身がこれまでに考案してきた調査方法の両者をよく吟味し、それらを基に今回の研究用に独自の実験方法を考察していくことである。

平成 18 年 12 月までに調査・実験問題を完成させ、大学生を対象に予備実験をおこない、彼らから意見を聞き、修正すべき問題点が見つければ 1 月末までに訂正し、平成 19 年 2 月から 3 月にかけて、各学校で実験を実施する。

4. 研究成果

平成 19 年度と 20 年度に小学生を対象に大規模な実験をおこなった。そして、平成 19 年度と 21 年度には中学 3 年生に対して大規模な実験をおこなった。実験結果は大規模になり、紙幅の都合で、ここではその一部だけを掲載せざるを得ない。

まず、小学生への実験方法から述べていきたい。この方法は、国立教育政策研究所が実施した調査方法とまったく同じものである。

以下の質問を小学校 6 年生に対して質問した。

問 1: Q: Hello. My name is XX. What's your name?

A: (My name is) YY.

問 2: Q: Nice to meet you.

A: Nice to meet you too.

問 3: Q: How are you?

A: I'm fine, thank you.

問 4: Q: How old are you?

A: (I'm) twelve (years old).

問 5: Q: When is your birthday?

A: (It's/ My birthday is) June 10th.

問 6: Q: (窓のある部屋ならば、窓の外を指差しながら) How is the weather?

A: (It's) sunny.

問 7: Q: (時計のカードを見せながら) What time is it?

A: (It's nine o'clock)./ (It's) five

- thirty.
- 問 8: Q: (色カードを見せながら,) What color is this?
A: (It's) red.
(もし, red を答えられないならば, 問 9 のために, This is red. と確認しておく)
- 問 9: Q: What color do you like?
A: (I like) green.
- 問 10: Q: Look at this picture. What animal is this? A: (It's a) dog.
(もし, dog を答えられないならば, 問 11 のために, This is a dog. と確認しておく)
- 問 11: Q: What color is this dog?
A: (It's) white and black.
- 問 12: Q: Look at this picture.
How many dogs do you see?
A: (I see) three (dogs).
- 問 13: Q: What animal do you like?
A: (I like) cats.
- 問 14: Q: Look at this picture. What food is this?
A: (It's) spaghetti.
(もし, spaghetti を答えられないならば, 問 15 のために, This is spaghetti. と確認しておく)
- 問 15: Q: Do you like spaghetti?
A: Yes, (I do). / No, (I don't).
- 問 16: (問 15 で No の場合)
Q: What food do you like?
A: (I like) curry and rice.
- 問 17: Q: Look at this picture.
What sport is this?
A: (It's) baseball.
(もし, baseball を答えられないならば, 問 18 のために, This is baseball. と確認しておく)
- 問 18: Q: What sport do you like?
A: (I like) soccer.
- 問 19: Q: (もし, 「サッカー」と答えたならば) Can you play soccer?
A: Yes, (I can). / No, (I can't).
- 問 20: Q: Look at this picture.
What subject is this?
A: (It's) math.
(もし, math を答えられないならば, 問 21 のために, This is math.(算数)と確認しておく)
- 問 21: Q: Do you like math?
A: Yes, (I do)/ No, (I don't).
- 問 22: (No の場合) Q: What subject do you like?
A: (I like) PE.
- 問 23: Q: Look at this picture.
How much is this ball?
A: (It's) fifty (yen).

- 問 24: Q: How much is this bag?
A: (It's) eight hundred (yen).
- 問 25: Q: Look at this picture.
Is Megumi playing the guitar?
A: No, (she isn't).
- 問 26: Q: Can you play the piano?
A: Yes, (I can). / No, (I can't).
- 問 27: Q: [I'm a teacher.] Look at this picture. What is he?
(理解しにくいようであれば, He is an English teacher. などと言い, 職業を尋ねていることに気付かせる。
A: (He's a) doctor.
- 問 28: Q: What do you want to be?
A: (I want to be a) teacher.

筆者(白畑)が調査対象校に出向き、学校側の全面的な協力の下、調査対象者である子ども達を一対一でインタビューした。一人の子どものインタビュー時間は、入れ替え時間を含めて 10 分程度であった。実験者は英語でインタビューしながら、一つの質問の解答を得る度ごとに、国立教育政策研究所が作成した評価基準に従いながら、その場で類型番号を答案シートに記入していった。

また、調査後に児童の発話を再度確認できるようにするため、インタビュー内容は録音された。白畑は、調査対象校に何度も授業参観に行っているため、当該小学校の児童達の様子や英語活動の進め方について理解していた。

平成 20 年度におこなった全体的な成績を以下に列挙する。これは前年度に続いての第 2 回目の調査である。

全 31 問中、90%以上の正答率をあげた項目は、「問 1 (2008) 100%」「問 8 (2007) 98.8%」「問 10 (2008) 96.5%」「問 6 (2007) 95.3%」「問 2 (2008) 94.7%」「問 9 (2007) 94.7%」「問 11 (2007) 94.7%」「問 15 (2007) 94.1%」「問 25 (2007) 94.1%」「問 14 (2007) 93.5%」「問 16 (2007) 92.6%」「問 18 (2007) 92.4%」「問 17 (2007) 91.8%」「問 3 (2007) 91.6%」の 14 項目であった。

続いて、89%~80%以上の正答率をあげた質問項目は、「問 26 (2008) 88.2%」「問 5 (2007) 86.5%」「問 13 (2007) 85.3%」「問 19 (2007) 85.3%」「問 12 (2007) 81.2%」の 5 項目であった。

79%~70%の項目は「問 21 (2007) 79.8%」「問 7 (2008) 78.2%」「問 27 (2007) 75.0%」の 2 項目であった。

69%~60%に属する項目は「問 4 (2008) 61.2%」1 項目だけであり、同じく、59%~50%の項目も「問 28 (2007) 52.1%」1 つだけであった。

そして、49%~40%のものは「問 24 (2007)

46.5%」の1項目、39%~30%のものは「問22(2007)39.7%」1つ、29%以下の正答率のものは「問23(2008)26.3%、問20(2008)22.8%」の2項目があった。

そして、全質問を合わせた総正答率は、80.3%であった。また、「無回答」は11.8%だった。

以上の結果と前年度の結果(ここには掲載されていない)考察から、全体の傾向として次のことが判明した。その前に、まず各類型に当てはまる調査対象者の解答割合をもう一度整理しておきたい。すなわち、平成19年度「1:正答」は76.1%、「準正答」は2.0%、「1」と「2」合わせて78.1%であった。そして、「3:文法的に大きな誤りがあったり、発音に難があったりして、通じないもの」は0.3%、「4:問われたことのないもの」は2.8%、「8:日本語で解答しているが、問われたことのないもの」は0.7%、「9:日本語で解答し、問われたことのないもの」は0.3%、最後に、「無回答」は17.9%であった。

一方、平成20年度の解答割合は次のとおりである。「1:正答」は77.1%、「準正答」は3.2%、「1」と「2」合わせて80.3%。以下、「3»:1.5%、「4»:3.9%、「8»:1.8%、「9»:0.6%、「無回答»:11.8%であった。

正答率は78.1%(19年度)と80.3%(20年度)であるから、どちらの年度共に定着度はきわめて高いと言えるだろう。つまり、英語活動の中でよく使用されている英語表現に関しては、多くの子ども達がその意味を理解し、使えるようになってきていると言えるだろう。ただし、1年間の「伸び」という点から正答率を眺めると、数字は若干上昇しているが、顕著に上昇しているとは言えない。「クラス全員の子ども達」を対象としたスピーキング調査では、80%ぐらいで天井効果(ceiling effect)を迎えてしまうのかもしれない。

それ以上に興味深い点は、「無回答」の割合が6%あまり減少していることではないだろうか。この無回答減少傾向は、児童が聞かれた質問に対して積極的に発話しようとする態度の具現化として捉えることもできよう。

また、児童達の聞き取り能力の向上により、相手の英語が聞き取れるようになって来たため、今までは意味が理解できなかったものが理解できるようになった証であるのかもしれない。つまり、「沈黙」は児童の「speaking能力」の問題ではなく、「listening能力」の問題で、発話しようにも発話できなかったため沈黙していた可能性もある。例えば、「あなたの言っている英語の意味が分からないので、もう少し分かりやすく言い直してください」などに相当する英語表現を学習していたならば、児童の「無回答」はもっと少なく

なっていたかもしれない。

「2年共通問題」は24問あり、そのうちの19問で正答率が向上していたが、残りの5問は正答率が低下していた。その原因を特定することはかなり難しい作業であるが、要因の1つとして、ある表現や項目を5年生時には学習したので分かっていたが、同一項目を6年生時には学習しなかったため、忘れてしまっている児童が多くいた可能性がある。例えば、What subject is this? の正答率は「54.3%→22.8%」に下降しているが、5年生時、6年生時と2年続けてこのような表現を使用する活動はしていなかったのかもしれない。

加えて、subject(教科・科目)という単語の意味が定着していないのであろう。その証拠に、What subject do you like? の正答率もかなり低くなっている(2007年度:75.7%→2008年度:38.8%)。

一方で、同じようにWhat ~? の質問であるWhat sport do you like? の正答率は、「2007年度:82.2%→2008年度:85.3%」と2年連続して高いことから、文構造の理解の問題というよりも、subject という語彙の問題であると推測できる。

小学校の英語活動において、sport(s)は頻繁に使用する語彙であるが、subject(s)はあまり使用されない語彙なのであろう。予習や復習が義務ではなく、覚えさせることが主旨ではない小学校での英語活動では、頻繁には現れない語彙や文構造はそれほど定着しないことの裏づけにもなる。

次に、中学3年生の成績であるが、主な成果を以下にあげておきたい。①時制(54.9%) (1)(現在)64.7% (2)(過去)52.9% (3)(未来)47.1%、②態(41.2%) (1)(Be+p.p)29.4% (2)(BE+p.p+by)58.8% (3)(byAの省略)35.3%、③法助動詞(37.3%) (1)(can)70.6% (2)(must)35.3% (3)(may)5.9%、④比較(58.8%) (1)(比較級)58.8% (2)(最上級)64.7% (3)(~の倍)52.9%、⑤代名詞(66.7%) (1)(所有格)64.7% (2)(目的格)70.6% (3)(属格・独立所有格)64.7%、⑥関係詞(30.9%) (1)(関係代名詞what)23.5% (2)(関係代名詞who)17.6% (3)(関係副詞where)35.3% (4)(関係副詞when)47.1%、⑦接続詞(27.5%) (1)(同格that)35.3% (2)(等位接続詞nor)11.8% (3)(結果・程度を表す)35.3%。

以上の文法能力の結果は、平成19年度の結果と変わりはない。つまり、文法能力は伸びなかったことが判明したのである。そのかわり、小規模にしか実験できなかったが、speaking能力とlistening能力は向上した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計9件)

- ① 白畑知彦 「第二言語習得研究に言語理論(生成文法理論)を活かすと見えてくること」 『ことばの科学研究』 Vol. 11. pp. 18-22. 2010年5月 ことばの科学会(査読あり)
- ② 白畑知彦 「英語教育における研究調査の基礎・基本」 『英語教育』 5月号 2010年4月 大修館書店(査読なし)
- ③ 白畑知彦 「言語習得研究成果の外国語教育への応用を探る」 2009年12月 *Southern Review*, No. 24, pp. 1-13. 沖縄外国文学会(査読あり)
- ④ 白畑知彦 「小学生の英語能力調査」 『中部地区英語教育学会紀要』 2009年3月 pp.173-180. (査読あり)
- ⑤ 白畑知彦 「生成文法理論の外国語教育へ応用を考える」 『言語』 11月号 大修館書店 2008年10月 pp.60-65(査読あり)
- ⑥ 白畑知彦 「特区における英語教育の実態調査の結果の分析」 『日本児童英語教育学会研究紀要』 富田祐一・椎名紀久子・白畑知彦・高橋美由紀 第27号、pp.1-24. 2008年9月(査読あり)
- ⑦ 白畑知彦 「外国語の文法習得のメカニズムとは何か」 『言語』 11月号、pp.58-65. 2007年10月 東京：大修館書店(査読あり)
- ⑧ 白畑知彦・萩山知世 “Japanese EFL students’ knowledge of English verb lexicon.” 『静岡大学教育学部研究紀要教科教育学篇』 pp. 185-211. 2007年3月(査読なし)
- ⑨ 白畑知彦 “Interpretation of English pronouns and reflexives by Japanese learners.” 『静岡大学教育学部研究紀要人文科学篇』 pp. 141-156. 2007年(平成19年)3月(査読なし)

[学会発表] (計6件)

- ① 白畑知彦 「明示的文法知識の有効性について」 全国英語教育学会 2009年8月
- ② 白畑知彦 「第二言語習得研究成果に基づく文法指導の方向性」 中部地区英語教育学会 2009年6月
- ③ 白畑知彦 「小学生の英語能力調査」 中部地区英語教育学会 長野信愛女子大学 2008年6月
- ④ 白畑知彦 The acquisition of transitive verb structures. EuroSLA2007 2007年9月 イギリス(ニューカッスル大学)
- ⑤ 白畑知彦 The interpretation of pronouns and reflexives in Japanese by Japanese ESL learners. EuroSLA2006

2006年9月 トルコ共和国

- ⑥ 白畑知彦 The acquisition of English pronouns by Japanese learners of English. 日本第二言語習得学会 2006年5月

[図書] (計3件)

- ① 白畑知彦 「第二言語習得研究からの示唆」 『スペシャリストによる英語教育の理論と応用』 小寺茂明・吉田晴世(編著) pp. 63-78. 松柏社 2008年4月
- ② 白畑知彦 「3章 小中連携を巡る課題 言語習得から見た小中連携」 『小学校と中学校を結ぶー英語教育における小中連携』 松川禮子・大下邦幸(編著) 東京：高陵社書店 2007年3月
- ③ 白畑知彦 『第二言語習得と束縛原理』 くろしお出版 2006年7月 307ページ

[その他]

ホームページ等
作成中

6. 研究組織

(1)研究代表者

白畑 知彦 (SHIRAHATA TOMOHIKO)
静岡大学・教育学部・教授
研究者番号：50206299

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし